

島村抱月の幼少期その他

—— 覚え書 ——

川 副 国 基

島村抱月の生れ故郷である島根県那賀郡の久佐村——いまは隣村合併で金城村久佐となっている——をたずねてみたいという多年の宿望をようやく一昨年の秋になってとげることができた。その地での、古老のはなしや、抱月顕彰につとめて来られた山崎克彦氏の案内や、抱月の少年時代を記した河上祐信という人の文章や、またわたしがすこしく実地に調べてみたことなどにもとづいて抱月の幼少期を覚え書ふうに書いてみることにする。

いまの金城村久佐というところは、浜田市から東の方の山奥へ十六キロばかりはいった山・農村である。いまは浜田市から広島市へ中国山脈を越えて通じている広浜バスで五十分ばかりのところにある。低いうねりをもって山や畠がつづいており、低地を江川の上流の清い水が洗っている。だいたいこの地方ははやくから山を越えて入ってくる広島文化の圏内であったようだ。抱月の祖父は入沢一平といい、島根県との県境に近い広島県山県郡の人であった。入沢家はその地方での旧家であり、一平は二十八代目にあたるという。久佐村は旧幕時代には代官所があったところでも

あり、小さいながらこの地方の政治の中心地であったらしい。一平は壮年時代に広島県からこの久佐郷に入ってきて、地主であり鉄山業・酒造業を営む土地の豪家でいままなお城郭のような大きな屋敷を構えている佐々田家に仕えた。佐々田家はこのあたりに砂鉄をふくむ大きな鉄山を持っていたが一平はそこで組頭のような役をつとめ、姓を佐々山と改めた。この祖父一平時代はこの寒村での指折りの富有な生活ぶりであったらしい。やがて自分でも鉄山を経営し、そこから出た鉄を毎日十数頭の馬に積んで十六キロの山道を浜田の港へ下し、さらに浜田港から帆船で下関をまわって大阪へ送っていたといわれている。いままも土地の浄光寺というお寺の墓地で、いちばん目立つ立派な墓所はこの祖父一平が建立した「佐々山家代々之墓」(万延元年建立)であって、往時の豪勢なさまがしのばれる。

この祖父一平の業をついだのは抱月の父の半三郎であったが、かれも名を一平と改めた。父、一平の妻、すなわち抱月の母はいまの益田市の薬種商大谷家の出で千勢子といった。熊屋とよばれた大きな佐々山家の家に抱月(佐々山滝太郎)は明治四年一月十

ということである。裁判所に勤務している時分には浜田町の親戚の三畳の間を借りて下宿していたが、つとめ先から帰るとただひたすら黙々として勉強にはげみ、読書に疲れると三味線の稽古などでうさをはらしていた。三味線の腕は相当なものであったという。服装は、貧書生であったせいもあるが、あかじみたよれよれの袴一つで年中をすませ、すこぶる無頓着であった。服装のきたなさということはその後上京して東京専門学校に入ってから同じことで、もちろんそのころも経済的な貧窮のせいであったろうが、中島半次郎とともに「弊袴先生の二幅対」と称されていたことは当時の級友たちが記しとどめているところである。

裁判所時代の下宿生活で抱月が使用していた机は、いま浜田町の山崎克彦氏が持っておられる。机という機能を果すだけの実用的なまことに粗末なものであるが、当時の抱月の忍苦と精進とが刻みこまれている感じである。机の裏には belongs to T. Sasayama といった文字が記されている。そういえばのちの抱月の英独留学時代の日記帳のはしにもこの belongs to……が使われていたと思う。

この英才抱月に目をつけたのは浜田裁判所の検事の島村文耕であった。島村文耕は巡査をふりだしに検事までのぼってきたこれも刻苦型の人であつたらしい。浜田裁判所の記録によれば安政元年五月十五日生れの島村文耕は明治八年三月一日付で「神奈川県中羅卒申付候事」という辞令を神奈川県からうけているが明治二十年十二月二十四日、司法大臣伯爵山田頭義の名ではじめて検事に任ぜられ、やがてこの浜田裁判所へ赴任してきている。二十二

年八月二十日付で司法省から「上級俸下賜」の辞令をうけているから巡査出身としては栄達した人であつたらう。この島村文耕は抱月の、上京して勉強したいという熱望を知って、月々五円の学資を支給する約束で再三、抱月を養子に迎えたいと抱月の父に申し入れた。長男で頭のいい抱月を手はなすにしのびなかった抱月の父も、抱月の火のような向学心に押されてそのことを内諾し、抱月は数え年二十歳、明治二十三年の二月に上京することになるのである。正式の養子縁組は二十四年六月であり、ここで抱月ははじめて島村姓となった。

抱月がその幼少年期を回想した文章はまことに意外なくらいにすくない。おそらく回想するに堪えないくらいの痛切な幼少年期であつたと思われるが、抱月の孤独な悲涼な精神はおのずからにしてこの時期に養われていったと思われる。島根県というところは出雲国と石見国とで形成されているが、出雲国系の人々が消極的、退嬰的で覇気に乏しいのに比べて、石見国系の人々は気宇闊達なところがあり、積極性がある。文人に限ってみても、石見国からは森鷗外や中村吉蔵を生んでいる。島根県となつてもからも県の有力な活動家は石見国系の出身者に多かったようだ。しかし抱月の沈鬱さ、内にももった静かさ寂しさというものは一般の石見人型とはちがうようである。幼少期の環境が抱月の精神をそのようなものにしてしまったのではないかと考えられる。

同年同月同日生れで、同じ時代の文芸評論界に活躍した高山樗牛が環境にめぐまれてかがやかしい学歴を追って進んだことに比

べて抱月の場合にはまことにいたましいものがある。また同年生れの、没落士族の子であった田山花袋も幼年を恵まれない環境で育ったが、しかし花袋にはまだ一応の教養をつけた長兄実弥登という教導者・庇護者があった。明治の文学者は、明治維新のための没落的・下降的階級のなから出た鬱勃たる祖家復興の念に燃えた、自我意識の強い人たちによって占められている観があるが、抱月は士族の出ではなかったが、没落的・下降的階級の出身者であったことはうたがいが無い。おのれのうちにひそんだ卓抜した特異性をなんとかして外に押し出して行こうとする苦悶は境遇が境遇であっただけに抱月において特にはげしかったであろうことが十分に察知される。

抱月の父の一平は抱月が英国留学中の明治三十八年一月、醉余のいろりの火の不始末から数え年六十一歳で焼死した。その七年忌とでもいう年に抱月は「故郷の父」というめずらしい父の回想を短く記している。抱月が十歳ごろの夏の夕ぐれ、庭前に飛んできたこうもりを見つけて晩酌の手をやめた父はいきなり、なげしにかけてあった檜の丸太の間棒をふりかざして庭にとびだし、こうもりを追うような姿で、憑かれたもののように棒使いの術を示したというのである。棒使いの秘術を尽して自足している父の姿に親愛感というよりも一種のすさまじさ、「慈愛の父といふ感じと調和しない、荒んだやうな気持」を、覚えた抱月は記している。抱月の父には、時としてこうした異常なげしきさといったようなものがあったのではないだろうか。それかあらぬか、抱月の心は父よりも病弱であった母の方に傾いていたように思われ

る。さきにも記したように、小学校をおえてから浜田町の病院の薬局生となったのも、母が薬種商の出であったという縁よりも、薬局につとめることが母の病氣療養に多少とも便宜となることであり、さらにそこにつとめてゆくゆきは医者となり、この母の病氣を治療してやりたいという一念からであったようだ。上京前後の抱月の志向も医者を選ぶか、文学者を選ぶかまだ低迷したところにあつたらしい。当時裁判所の上役に石見津和野出身の鷗外と親しい人があつて、志望を決めかねている抱月に、上京したら鷗外をたずねて指示を仰ぐようにと紹介状を書いてくれた。鷗外こそは軍医であり、また文学者であった人である。上京直後の抱月が、早速鷗外をたずねて相談をしたことは、すでにほかのところへも書いたからここでは触れない。ここで重要なことは、抱月と鷗外とのむすびつきは、抱月と逍遙とのむすびつきよりもはやかたことである。その後の抱月にはその後の恩師逍遙とおそらく同じ重さあるいは同じ重さ以上で、鷗外のことがつねに心を占めていたことである。

母の千勢子は、抱月が島村文耕の姪いち子と結婚した年である明治二十八年の十一月に病没した。このとき抱月は、温泉津町の安楽寺に嫁いでいた妹いち子からの母危篤の知らせで、薬を携えて山陽線の小郡駅まで来て、そこから徒歩で山を越えて益田の母の生家までかけつけたが、母の葬儀はすでにすんだあとであつて、抱月は仏前に薬を供えて声をあげて号泣したといわれている。

「ははが目を一を見んと」「はるばると薬を持ちて」「死に近き」母の許にかけつけたのちの茂吉の場合も想起される。抱月が

上京して以来、郷里の土を踏んだのは生涯にこのときいちど限りであった。母親以外に抱月を郷里にひきつけるなにももなかつたとさえ考えられる。抱月の母性追憶、女性のやさしい愛情への飢えといったものは、結婚しても冷たかつたといわれるその家庭生活と考え合わせて、やはり大切なものとならう。

抱月は弟妹思いでもあつたようだが、特に妹いち子はいとしんでいたのではないだろうか。抱月がこのいち子の縁談について父の一平に書き送つた書簡が発見されて土地の同人誌に二年ほど前に掲げられている。時代は推定してないが、抱月より九つ年下の妹いち子が二十というから多分、明治三十二年のものと思われる。

拝啓 秋風の砌如何御暮なされ候やと案じ居申候

寛一義無事にて国家の為に相暮し居り何よりの義と存申候
此方一同無事御安心下さるべく候

雅一義も去年来当方において法律学校に通ひ居り候

妹義嫁入の口これあるよしにて御相談の趣拝承光善寺もおあさとのさやうの心得にては伯母死去後の折合如何にも心掛りには候へど併し浜田の口と申すは小生の考えにてはなはだ宜しかるまじと存じ候

二度目と申係累も多き家へ剩へ先方が身代よければよき程此方がひけるわけにて当人の為苦勞の淵に沈めるやうのものもと存申候二十と申せば未ださしておくれたりと申わけにもなし光善寺がいけずば双方ともやめて他に口を捜すなり、何れとも方法これあるべきか、元来先方の身代財産の多少によりて嫁入口のよしとあしとを分つは以ての外の間違かと小生は存

申候

当人のためには身分のつりあわねば合はぬほど苦勞こそあれ何の安楽もなきは当然にてやはり見立てる目的は夫となるべき人間一つと存申候

人間さへしつかりといたしており候はば今は無一物にても聊かも苦しからず嫁入りして後夫婦して造り上げたる身代が何よりの安楽と存申候

返す／＼もむことなるべき人柄をえらびそれに御めあはせなさるやう小生等は希望の至りに奉存候

徒らに先方の身代に目安を置きたる婚姻沙汰は小生等断して不賛成にごさ候

右御返事申入度候

拜具

十月十六日

父上様

滝太郎

文字に暗かつたかと思われる父一平宛の書簡のせいか、ちよつとむずかしい漢字にはふりがながつけられている。文字もことさらに大きく記されているという。文中の光善寺というのは浜田の寺でこの寺の十一世長証というのに抱月の伯母(父一平の姉)よし嫁いだのである。おあさというのはこの伯母夫婦に子がなかつたために一平の姉いせの長女あさがもろ養子として嫁に迎えられたのであつた。抱月の妹いち子は伯母おじのところへひきとられて養女となり、結局は温泉津町の安楽寺に嫁いだ、その間あさといち子の折合がうまく行かなかつたのであろう。この書簡はこの妹いち子の他の縁談・相手は身代はあつたが再縁で係累も多

かったのに対する抱月の反対意見である。抱月の近代的な人間本位の結婚観が示されている。囁んで含めるような文章である。

抱月の幼少時代を知る古老はもう金城村にもひとりふたりしかいない。そのひとり佐々木貞次郎さん（八十四歳）の話によると抱月は、鳥飼いを好んだ父の血をうけて、目白などをとって遊ぶ静かな子供であった。浜田町へ出たのちには土曜・日曜には帰宅して母に侍していたが、いつもひとりで本を読んでいたという。抱月が文芸評論家として名をなし、早大教授としても令名が高かったころには村では、日本一の文学者が出たといつて賛歎的であったが、須磨子事件をきっかけに芸術座を組織して抱月が全国を巡業しはじめたころには、「抱月さんもうとうとう河原乞食におちぶれた」という村の風評であったという。封建的な空気の強いこの地方で、家庭を捨て恩師にそむき大学教授の地位を去って愛人とともに旅興行に出たということは、ずい分ショッキングな事件であったらしい。抱月の名はあるいはこの地方では一時期にタ

ブーであったかもしれない。

しかし、いまでは浜田市の公園に立派な抱月の顕彰碑も建てられていた。金城村では村の青年たちの演劇会に抱月賞というものが設けられているというのであった。わたしが感じ入ったのは抱月が学んだ久佐小学校の校歌の一節に「永久にかわらぬ真心の道を求めて抱月のさすらい清く後をつぐ 小獅子よ我等 いざ励め」というのがあったことである。抱月という文学者の意義を永遠の真理を求めて苦しい魂の彷徨をつづけた、というところにはつきりみとめておくことをうれしく思ったのである。抱月のこの村での旧居ははやい時代にすでに解体されてしまひその跡もないものと村人たちにもながく信じられて来ていたのに、わたしが逢った古老のはなしから、その旧居はこの久佐小学校の傍に移されて原形をとどめていることがわかったのも一つの収穫であった。まことに粗末な無人の百姓家であった。村当局の手で保存されることになったと聞いている。